

陳元賛の傳記、書翰と『老子經通考』の思想

李麗

本論文は江戸初期日本に渡来し、日本文化に寄与した陳元賛の伝記や書翰の整理を行い、その著書『老子經通考』に見られる林希逸批判の考察を通して、初めて陳元賛の思想を明らかにしたものである。三部十章で構成されている。

序章は、本研究の背景、先行研究及び本論文の目的と構成を述べたものである。

第一部 陳元賛の人物像（第一章、第二章、第三章）

第一章「陳元賛の傳記と年譜」では、まず江戸期の主な陳元賛の傳記史料を一堂に集めて、年代順に整理した。次に、これまであまり知られていないが、詳細且つ信憑性の高い尾張藩士中山和清著『諸士傳略稿』の陳元賛傳を精査することで、各傳記間の不一致を訂正した。最後に出典史料の具体的な内容を提示した陳元賛の略年譜を作成し、陳元賛の生涯を明らかにした。

第二章「陳元賛来日の目的——『人見雜記』の記録を中心に——」では、まず彰考館所蔵『源義公御筆陳元賛書入』より、これまであまり知られていなかった陳元賛と水戸藩義公德川光圀とも交流があったことを明らかにした。これより「人見璣邑人見雜記」と主張する小松原濤の説を訂正し、『人見雜記』の著者は義公に仕えた人見卜幽であることを論述した。次に、人見卜幽の記述の読みについて議論し、これより陳元賛が兄とともに、盗賊探しのために来日したという新しい説を明らかにした。最後に、元和七年明朝使節単鳳翔来日投書の際、陳元賛が通訳を担当したことから、陳元賛と単鳳翔の投書事件の関わり等について精査を行い、その時の外交文書が偽書であったことを明らかにした。また、張振甫とともに、来日した記録より、張振甫と陳元賛の関わりを検討し、陳元賛来日の真の目的について試みたものである。

第三章の「陳元賛の書翰」は、フィールドワーク史料調査で収集した未公開の陳元賛書翰を中心に、現存する陳元賛が元政上人に宛てた書翰の転写本を校訂し、真跡等を翻刻、整理したものである。第一節では、国立公文書館の内閣文庫蔵『陳元賛書翰』（転写本）の所収書翰をキーワードで整理し、「内閣文庫蔵『陳元賛書翰』キーワード表（修正版）」を作成することで、既に発表した調査報告書（拙稿「陳元賛の伝記及び江戸初期の日中文化交流についての一考察：内閣文庫蔵『陳元賛書翰』を中心に」）のキーワード表の一部を訂正した。第二節では、未公開史料瑞光寺蔵『陳元賛書牘（開山宛）二十四通』（真跡）を翻刻し、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の重複書簡との比較を行い、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の一部分を修正することが出来た。第三節では、未公開史料瑞光寺蔵『芝山尺牘』五十八通を翻刻し、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』との比較により、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』正誤表を作成し、転

写本である内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の修正を行った。本章の未公開史料の発表は陳元賛研究の基礎資料の不足を補って、重要な意味を持つ。

第二部 『老子経通考』の書誌的考察（第四章、第五章）

第四章『『老子経通考』の序跋と傳本研究』では、まず『老子経通考』の序文を考察し、陳元賛が八十四歳の時に当時の日本の老子受容の状況を嘆いて、初心者のために『老子経通考』を完成させた執筆の目的を明らかにした。次に、跋文の考察により、江戸初期跋文がなる一六八〇年で既に『老子河上公註』が刊行されない等の事情を明らかにした。最後に、『老子経通考』の傳本状況より、この書物は江戸末期まで刊行し続けたことを明らかにし、刊行の必要性から『老子経通考』が広く人々に読まれていたことを推測できた。

第五章「陳元賛『老子経通考』と焦竑『老子翼』——引用状況に基づく考察——」では、『老子経通考』と『老子翼』に見られる他の『老子』註釈の引用状況を一覧表で具体的に示し、陳元賛は焦竑の『老子翼』を底本とし、当時日本で読まれていた林希逸註などを付け加えて引用し、好ましくない諸家註に対する批判が見られることが分かった。中に林希逸『老子虞齋口義』の引用は三十九章あるものの、そのうちの三十二章はそれに対する批判であったことから、陳元賛『老子経通考』執筆の目的は林希逸批判のためであったことを明らかにした。また、『老子経通考』は江戸初期日本における老子受容を研究する際に重視すべきものであることを、本論文の考察で改めて認識できた。

第三部 陳元賛の思想——『老子経通考』にみられる林希逸『老子虞齋口義』批判を中心に（第六章、第七章、第八章）

第六章「陳元賛の有無観」では、林希逸の仏教的な「有無中道」観に対する批判を手がかりに、陳元賛の有無観を考察している。林希逸の「なお心の上に就きて理会することを要す」（『口義』第一章）と、『老子』を理解する際に心において理解すべしという主張のような儒家心学的な老子解釈及び仏教の「空」の思想で老子の「無」を解釈することは老子の本意ではないと陳元賛が批判したことを明かにした。

第七章では、『老子経通考』第五章にみえる『老子虞齋口義』批判を中心に、『老子』の「天地不仁」「聖人不仁」の解釈をめぐる、陳元賛の「天心聖心一致」論を明らかにした。また、陳元賛は、林羅山の道春點頭書『老子虞齋口義』の頭書に引用されている程子の説を猛烈に反駁しており、これより、陳元賛は、程子の考えに同意している林羅山の老子観を暗に批判しようという意図があると読み取れる。特に、考察の過程で、「聖人不仁」を否定する程子の説は道春點頭書『老子虞齋口義』の頭書にも引用されていることから、陳元賛は、程子の説を批判することによって、実は暗にその考えに同意している林羅山の『老子虞齋口義』理解を批判しようとしているのではないかと推測できた。

第八章「陳元賛の實学思想」では、『老子経通考』に見られる林希逸批判のうち、主に「實理」に関わる第六章、第三十八章、第六十章、第六十一章と第六十三章を取り上げ、まず『老子』の本文を提示し、次に、林希逸『老子虞齋口義』の註釈を考察、最後に『老子

『經通考』でどのように林希逸を批判しているかを考察し、林希逸の老子に対する誤解を明らかにした。特に林希逸の『老子』が物を借りて道を悟らせる処を眞實のこととして理解してはならない、「借物明道」観を批判して、物を借りているが、実際のことにも通用する。林希逸はただ老子が虚無を本としていることを知っているが、なぜ無を本とするのかは知らない。老子が無を重視しているのは、「有の本は無にあり」、老子はただ「本を務む」からだ、虚無は實理であると説いている。このように、陳元賛の林希逸批判は一貫して、林希逸は儒家のいわゆる仁義礼智のような經術政教の道で老子が説いている天理流行の道を理解しようとする。この意味で林希逸を含む諸々の儒家の説は實理を究め尽くしていないと言っている。

終章は、全体のまとめ、今後の課題・展望を述べたものである。